

## 学問のすゝめ

2011.4.8 (金) 第1号

### 夢の数と若さ

■「日本に革命をおこす」。

これが、大学時代に描いた私の夢。ちょっと物騒だ。まわりの多くの者も、真面目に、一途に、そう思っていた。若すぎた。そういう世代。

私齋藤は、今年55歳。若いときから夢がたくさんあった。その後、革命以外はそこそこ夢を叶えてきた。小学1年生から高校3年生まで12学年の担任をすべて経験した。結婚もして、子どももできて（現大2、高2）大学も3回行った。



北見柏陽・双子の桜（秋編）

最後は3年前に修了した道教育大の大学院。3年担任を持ちながら歴史論文を書いていた。

しかし、夢が叶った分、残念ながら新たな夢が減っている。あなたがたと夢を語り合ったら、そちらの勝ちだろう。それを思うと泣きそうになる。年齢をとりかえられるなら、とりかえてほしい。私よりも、絶対にあなたの方がまさっているもの、それは、

夢の数。そして若さ。

これは断言できる。

お笑い芸人島田紳助。彼が吉本総合芸能学院での特別講義を著書にして1昨年出した。『自己プロデュース力』島田紳助著。そこにこう書いてある。

神様が「今、お前に夢と若さと売ったんで」と言うんだったら、僕は十億円払うでしょう。お金なんてなくなったっていい、十億円払います。ということは、みんなは、今、十億円の価値を持っているということなんです。

■終業式が3月24日にあった。

私齋藤が、3-1のA担任を持つよう校長先生に言われたのが、その1週間前。その日から、顔写真と名前を頭に毎日突っ込んでいった。が、年のせいで覚えきれない。悲しい。

3月初旬、朝の遅刻指導で生徒玄関へむかった。途中で唯一2-1だけが合唱の練習をしていたことは明確に覚えている。モルダウだったと思う。

その時、このクラスいい雰囲気するなあと感じた。まだ、私が担任と決まる前。

■春休み中は、新3-1の生徒を意識した。男子バレー部の山本大地は当然よく知っている。教室では合田彩と言葉を交わした。吉田有斗とも職員室で言葉を交わした。二人ともしっかりとした言葉遣いだった。職員室に来て、「自転車許可願いがほしいんですが。」と言ってきたのが亀谷公穂。はじめ誰だか認識できず失礼なことをした。村上遙には職員室で、壬生先生からご紹介いただいた。楽しそうな子だ。松田紗季にも職員室で成績関連の郵送の件で会っている。浅野舞子も麻疹接種報告書を持ってきた。種田未音は一人で朝から教室で勉強していた。立派！

4月からの1年間は、その後の人生を左右しかねない1年間となる。進路実現に向けて教師と生徒がいっしょになって団体戦で闘う。

私は教師生活33年間で蓄積したあらゆるものを伝授し、表現していくので、あなたがたもきちんと自分を「表現」して欲しい。

実は、年のせいで記憶がどんどん落ちている。抜けているところもでてきた。そこは、若いB担の小森猛先生が補ってくれる（と思う）。こんな私だが、1年間よろしくお願ひします。

〈文責・A担齋藤満幸〉

## 学問のすゝめ

2011.5.24 (火) 第 11 号

# 手の平を血で染めながら たぐい寄せる人だけ「幸運は来る」

(幸田露伴)

■瞬間、カメラを通して見る選手の姿が、涙でかすんで見えなくなった。

先週の金曜日の壮行式。私は、選手入場口とは反対側に立ち、望遠レンズ付きのカメラを覗き込んでいた。

入場が始まってすぐに女子バスケット部が入ってきた。先頭は渡部由菜。そして次の選手の松葉づえ姿が視野に入った。瞬間、私はまともにその子を見ることができなくなった。

事情は、早くから娘（バスケットをやってる）から聞いていた。本人が一番辛いと思う。

が、今は本人のためにもがんばるといふ、結束力の最も強いチームになっていると信じたい。このままでは終われない。



■いよいよ高体連支部予選が始まる。

小学校から始めていたスポーツが、これで終わりを迎える者もいるだろう。だから、

いつもとは違う大会。

2年生にレギュラーの座をわたした者、直前で怪我をした者、体調が悪い者もいるだろう。しかし、スポーツにはつきもの。ハンディは乗り越えるしかない。

そして、キャプテンという責任ある立場で、1年間、集団の先頭にたってきた者もいる。3-1の部長は志賀輝洋（男子ソフトテニス）、今井乃莉子（女子バレー）、種田未音（女子バドミントン）、早弓菜々（女子ソフトテニス）、渡部由菜（女子バスケット）。

立場上、他の子とは違う苦労を背負ってきたはずだ。悔いのない試合をしてきてほしい。



■この時期は自分の高校時代が蘇える。

私は、ラグビーをやっていた。指導者は全国大会決勝まで進んだ時のOB。外部コーチ。当時、ラグビーの全道大会は10月。全国の花園が1月と決まっていた。今思うと、高校生活のすべてをラグビーにかけ、大学は最初から浪人と決めてかかっていた。

卒業してから10年、20年、30年と過ぎ、悩みも増え、教師を続ける自信を失うことが幾度か生じた。ある時、私は夜中に車をとばした。行き先は、高校時代に汗を流したラグビーグラウンド。つくなり、真っ暗闇の中を一人で走った。どれだけの汗が流れているかしのれない思い出のグラウンド。

何年たってもそのグラウンドから力をもらっている。

■努力した人間は、その努力に応じた「幸運」を神様からいただく。

「幸運」は、待っていてもこない。白い手袋で綱を引いてもこない。

手の平を血で染めながらたぐり寄せる人だけ「幸運は来る」。

幸田露伴の『努力論』にある有名な言葉である。

3年間の部活に全力をつくして高校生活を終え、納得のいく涙がだせる者は幸せだ。

